

# 「源氏語り54帖」 「彩の国さいたま寄席 四季彩亭」 古典の奥深い魅力に触れる

彩の国さいたま芸術劇場は、シェイクスピア・シリーズや、コンテンポラリーダンスの公演で知られる劇場だが、古典の企画にも以前から取り組んでいる。特に人気が高い「源氏語り54帖」と「彩の国さいたま寄席 四季彩亭」に注目、その魅力を探ってみた。  
取材・文：鴨澤章子

## 『源氏物語』すべてを踏破する 壮大な「源氏語り54帖」

「源氏語り54帖」は、54帖に及ぶ『源氏物語』をすべて朗読で聞かせ、さらに解説するという壮大な企画。朗読を女優の幸田弘子さんが、解説はフェリス女学院大学教授の三田村雅子さんが行っている。2001年に始まり、以来、ほぼ2ヶ月に1度の割合で行われて来た公演は、今回は第33回の「柏木」が予定されており、いよいよ佳境に入る。

「このお話をいただいたときは、とても嬉しかったです。『源氏物語』の朗読は、ほかの企画でもありますが、54帖すべてを、しかも原文で朗読するというのは、この劇場だからできることです」

こう語る幸田さんは、舞台朗読の第一人者で、30年以上前から『源氏物語』にも取り組んでいる。その幸田さんにとっても、「源氏語り54帖」は特別な企画だ。実は第1回の公演の1ヶ月前に、幸田さんは突然、くも膜下出血で倒れ、奇跡的に回復したものの、立って歩けないほどの状態を、おして舞台上立ち朗読したという秘話がある。それほどの思いでスタートした公演なだけに、思い入れの深さは想像に難くない。

「とにかく長年にわたり続く公演ですから、以来、この公演を最後まで続けることが、私にとっての励みになっています」（幸田さん）

第1回から欠かさず公演に来ているお客さんも多く、公演の度に顔を合わせる楽しみもあるという。三田村さんもこう言う。

「来ている方がみな、『源氏物語』を知ろうと学ぶことに初々しくて前向きなんです。そのことに私の方が逆に励まされます」

「広い視野から見られる方です」と幸田さんが語る三田村さんの解説は、絵巻をスクリーンに投影したり、当時の音楽を再現した演奏



朗読をする幸田弘子さん。その回の源氏物語の内容に合わせて、毎回替えている和服を楽しみにしている観客も多い。

©浅野いずみ

を入れたり、研究の最前線を取り入れながら、しかもわかりやすく親しみやすいことで知られる。その工夫もあり、原文のまま朗読される千年も前の人々の営みが、現代に生きる我々にも共通するものとして迫ってくる。

「幸田先生の朗読は、現代語のイントネーションで古典を語れるから、生きた形で伝わってくるのだと思います」（三田村さん）

「千年前と言っても同じ日本人ですし、自然描写などは現代と変わりません」（幸田さん）

お二人のコラボレーションにより、鮮やかに蘇る、千年前の壮大な物語は、これからはまた面白い。

「（出世競争に）勝って栄華を極めた光源氏も、年老いてゆくむなしさを抱え、負けた人々もまた悲しい。その陰りゆく美しさが描かれます」（三田村さん）

## 柏木

柏木は光源氏に呪われたことで、病の床に沈み、命さえあやうくなった。女三宮は年が明けてすぐ男子を産んだが、光源氏の冷たさに将来を悲観して出家する。これを知った柏木は一層絶望し、親友夕霧に光源氏への謝罪と妻女二宮の行く末を託して亡くなった。光源氏は薫五十日の宴に、薫を抱きながら、その面差しに亡き柏木の面影を認め、息子を見ずに亡くなっていった柏木を哀悼し、自ら犯した昔の密通の罪を償おうとする。

## 横笛

柏木の遺言を受けた夕霧は光源氏にその内容を確かめてみたいと思いながら、その勇気もなく時を過ごしていたのだが、ふとしたきっかけで、亡き柏木が夢枕に立って自分の子への執念を語りかけるのを聞いた。柏木未亡人の母一条御息所に柏木遺愛の笛をもらい笛を吹きながらうたたねをした時のことだった。その笛を遺したい人は他にいと聞いて夕霧が思ったのは女三宮が産んだ薫のことであった。

## 鈴虫

蓮の花の盛りのころ、六条院で女三宮のための念持仏開眼供養が営まれた。若い盛りで髪を下ろしてしまっただけの女三宮のために、できる限りのことをしてやりたいというのが光源氏の願いであり、紫上もそれに協力した。秋になって鈴虫の鳴き声を聞きながら女三宮に対する捨て切れない思いを打ち明ける光源氏と、女三宮のすれ違いに満ちた関係を八月十五夜の月はどこまでも明るく照らしていた。



©浅野いずみ

学術的にも先端的、しかもわかりやすい解説の三田村雅子さん。NHK教育TV「古典への招待」の講師としてもお馴染み。

時を経て移ろいゆくものと変わらないものを考える、またとない機会となりそうだ。

## 源氏語り54帖

【日時】第33回:10月1日(日)「柏木」 第34回:12月3日(日)「横笛」  
第35回:2007年1月13日(土)「鈴虫」  
第36回:2007年3月11日(日)「夕霧」

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

【演出】幸田弘子(朗読) 三田村雅子(解説:フェリス女学院大学教授)

【チケット(税込)】全席指定 1回券 2,500円  
第34~36回連続券 6,600円

【発売日】第34~36回 メンバーズ 9月23日(土・祝)  
一般 10月1日(日) ※第33回チケットは発売中

## 夕霧

夕霧の落葉宮への思いはつるのぼかりであったが、落葉宮の母一条御息所が病氣治療のため、小野の里に移転すると、夕霧は小野まで訪ね、落葉宮の部屋で一夜を明してしまふ。御息所は心を痛め、この事態を切り開くべく、結婚の承諾の手紙を夕霧に出す。ところが、その手紙は妻雲居雁によって隠されてしまったため、手紙の返事が遅れる中、御息所は夕霧の訪れないことを恨み、絶望して死に至ってしまった。

## 究極のエンターテインメント 落語を「彩の国さいたま寄席 四季彩亭」で

ここ数年、若い人たちの間でも人気が出てきている落語。寄席の前で入場を待つ人々が作る行列も今ではよく見られる光景だ。人気脚本家、宮藤官九郎が落語をモチーフにTVドラマを作ったり、人気落語家が大名跡・林家正蔵を継いだりと、落語にスポットライトが当たるようになった理由はいくつも考えられるが、やはり根本は落語そのものの魅力につきるだろう。演劇界でも宮藤以外に限らず落語ファンは多く、劇団「ラッパ屋」を主宰する脚本家の鈴木聡も、新作落語を柳家花緑に提供するほか、当人も高座に立ってしまったほど。一人で何役も演じ分け、長屋でも色町でも、落語家の語りだけでひとつの世界観を創り上げてしまう落語は、まさに究極のエンターテインメント。その奥深い味わいに、改めて気がつく人が増えてきている。

彩の国さいたま芸術劇場でも、12年前の開館当初から落語に着目。志ん朝や小さん、米朝ら当代名人の寄席のほか、若手落語家たちが登場する「拾年百日亭」をシリーズ化し、年間最優秀演者に贈られる「彩の国落語大賞」を設け、三遊亭白鳥や柳家花緑など、今をときめく若手が受賞してきた。昨年から、「彩の国さいたま寄席 四季彩亭」としてリニューアル、若手からベテランまで幅広く紹介し、好評だ。今年中にあと2回公演を予定しており、10月には三遊亭小遊三、12月には春風亭昇太が登場。共にTV「笑点」の大喜利でもお馴染みの2人。どんな高座を見せてくれるか、今から楽しみだ。

## 彩の国さいたま寄席 四季彩亭 ～三遊亭小遊三

ご存じ三遊亭小遊三師匠をお迎えしての秋の「彩の国さいたま寄席」。共演者の皆さんが決まりました。ネタの豊富さには定評のある桂平治さん、声の大ききなら落語界随一の三遊亭遊馬さんの若手噺家に加え、太神楽界の新星 鏡味正二郎さんが華を添えます。どうぞお楽しみに。

【日時】10月21日(土)開演16:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

【出演】三遊亭小遊三 桂平治 三遊亭遊馬 鏡味正二郎

【チケット(税込)】一般 ¥3,000 メンバーズ ¥2,700

ゆうゆう割引(学生・65歳以上) ¥2,000 ※発売中

## 彩の国さいたま寄席 四季彩亭～春風亭昇太

【日時】12月8日(金) 開演 19:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

【出演】春風亭昇太 林家彦いちほか

【チケット(税込)】一般 ¥3,000 メンバーズ ¥2,700

ゆうゆう割引(学生・65歳以上) ¥2,000

【発売日】メンバーズ 10月21日(土) 一般 10月28日(土)



「彩の国落語大賞」の受賞者には、三遊亭白鳥(右)、柳家花緑らも。